

王 好雨  
WANG Haoyu



自渡  
紙・燃る、編む、草木染め



## 生命は情報に現れる -自渡-

人類は、数万年前、祈り、願い、思い、生きる為の意思や考えを表すために、絵や文字を描き伝達してきた。様々な生命の痕跡・情報は、DNAのように点や線を組み合わせることで、ある意味を発現させたのである。生命は、DNA(遺伝子)の4つの塩基が様々な組み合わせ・配列により継がれ、私たちは、DNAに記録された情報に従うように、この世界に生きる。

本研究は、作品の制作の実践を通し、人類が生きる為の情報を残すために発現させた「文字」、それを残してきた「紙」という側面から、「生命」の意味についての考察・探求を行い、衣服造形の制作方法である「衣服を構成するさまざまな要素」を素材に芸術表現を行うことを目的とする。

「自渡」とは、「生きる『苦』から『空』に向かう最中」を意味する。

『般若心経』の中には、この世の本質は「空」であると伝える。この世で生きる人々は、欲望の中に生きる。欲望には、苦が生じ、苦は、人に絡まる。

本研究では、これまでの研究の主軸に据えてきた「生命とは情報である」という仮定を基に、1400年前に三蔵法師により翻訳・紙に記され伝えられた『般若心経』(正式名称『般若波羅蜜多心経』)276文字を、人類が生きる為の「情報」と捉え「生命」についての考察・探求を進めた。

『般若心経』には、「無苦集滅道」という一言がある。

苦とは、人生における苦しみで四苦八苦を指す。

四苦は、我々人間として、逃げられない生、老、病、死という苦しみと、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦という自分の内部に沸き起こる苦である。

「苦」に包まれた人間は、解脱への道に、うろうろと徘徊して一生を過ごす。

私は、苦から空に向かう最中を「自渡」と呼び造形表現した。

本研究では、これまでの研究の主軸に据えてきた「生命とは情報である」という仮定を基に、『般若心経』を、人類が生きる為の「情報」と捉え「生命」についての考察・探求を進め、「生命」とは、苦に絡まれる人が、人生・道に迷いながらも自身の力で「空」に向かい生きる最中に見出せることを理解した。しかし、生命の本質・意味は、まだ不明である。

今後もさらに「生命」の意味の考察・研究を重ねてゆきたいと考えている。ゆきたいと考えている。